

# 職場における交通安全指導 Part.8

## トラックの多発事故パターン 追突事故

交通事故統計によりますと、全事故件数のうち追突事故が占める割合は約 21%で、トラックによる事故をみますと、実に約 50%が追突によるものです。

追突事故を防止することによって、トラックによる交通事故は激減することは間違いありません。

そこで、社内における運転者教育の最重点テーマとして取り組んでいただきたく、今回より2回に亘り、追突事故防止について掲載いたしますので、参考資料としてご利用ください。

組合では、追突事故の形態や原因をいろいろな事例について分析を行っておりますが、追突事故は「前を見ていれば追突するはずがないじゃないか」と思われる方もいると思いますが、実際には前を見ていても事故を起こす運転者もいます。

では、その中からいくつかの問題点をあげてみることにいたします。

### <トラックの特性に起因する事故>

トラックは乗用車とは車両の大きさ、重量において異なり、追突事故が発生した場合、衝撃力は大きく、車両破損程度でおさまるケースはまれであり、そのほとんどの場合が、相手運転者や同乗者が負傷し、スピードが加わっておればその力は急激に大きくなり、相手方はもちろんのことですが、追突したトラックの運転者本人も死亡するという事故も現実に発生しています。

トラックは、運転席が乗用車よりも高い位置にあり、運転者は視界を見下ろすような形になり、知らず知らずのうちに車間距離が詰まり、万一の場合にブレーキが間に合わず、追突事故を起こしてしまいます。

### <交差点並びにその付近が危険地帯>

交差点付近は、停止・発進という運転行為が最も多く行われる場所だけに、追突事故が最も多い**危険地帯**といえます。

#### 事例1

Aは交差点手前で信号が青から黄色に変わったが、通過できるだろうと思い減速せず、また、前車も当然通過するだろうと思ったが、前車が停止したため追突した。

この事例の場合、Aは、「今、黄色に変わったところだから、このまま通過できる」と勝手に思い込んだ、いわゆる“だろろ運転”が大きな原因です。

交差点が近づくと「赤信号で待たされたくない」という思いから、不用意に車間距離を詰めて前車に追従するといったことは、運転者に共存する心理のようです。特に目的地への到着時間、配達等に間に合わないといった“焦り”がある時は、より一層この気持ちが強くなるものです。こうした“焦り”が「前車は通過するだろう」といった判断をし、慎重さがなくなったことも原因としてあげられます。

#### 事例2

信号待ちをしていたAは青に変わったので発進したところ、前車が急に止まったため、追突した。

この事例の場合、Aは、前車は信号が青で発進したので、自分もスムーズに走行できるものと思い込んでいたために、警戒心がまったくなくなり、事故を招いたといえます。

前車はいつどんなことで急に停止するかわかりません。例えば、前方を走っている二輪車がふらついたり、旧に進路変更したり、あるいは対向車の無謀な右折がないとも限りません。

交差点やその付近では、「まさか」ではすまない落とし穴が多くありますので、“だろろ運転”から危険がある“かもしれない運転”を心掛けることが、追突事故を防ぐポイントです。